和歌

六ヶ條秘抄

耕雲口傳

桂月抄

九

伊地知文庫
文庫20
324
9

文庫20
324
90

耕雲口傳

伊地知氏書冊

いとせあまり白川の東花頂山の奥より幻賀
をうくしく庶永(よせてい)より友をむすひ泉石より心を
をまして年々次ほとに應永(百代後小松)十あまり
五の年やよひの末ころあ光ありけきゆ
きハ物ををうけ見かくし花ハ盛ゆ
散みちて弟をのちひしきこれ物ゆくすす
ゆくかたよりよ山居しそ法僧尋ねてき
をあ法談なもの次より屋まもうををん
道もてかたのうちすうれ物

道をたこされてくよにあるとゝ[illegible]ひろ人巻
おれをゝゝるまゝすといふさゝるゝ斎乃巻
の巻地れ細腰も無道のまゝ[illegible]
にまはひゝゝゝゝりまして我豊葦原
乃代ゝはゝゝゝる蓬俗ゝれた雅う巻を
よゝゝゝゝゝ森誠上の好所ゝゝゝゝ
といふ先聖の格言もおもひたゝゝ絶ゝゝ
教ゝゝゝ方をよひなき道ゝれゝゝ高山
をあふき景もふはもふ広さゝ侍ゝ道ゝ
をゝいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

へきものにゝゝれをゝ予答云七八果のむ
ゝゝゝゝ先老内のおほいゝゝちきゝのひさ
の下をゝゝれすゝみやゝゝゝものまゝひ
まゝゝゝゝゝをのゝゝれんせれ極ゝた
れ乃諸義ゝもゝゝゝすきのひさゝゝく侍し
ゝゝゝ骨をう弟ゝもなくて弱冠八年
八父兄の大故にあひく三ゝ勞の日ゝ
衣ゝゝ内ゝゝゝ乃一ゝゝゝゝ乃巻ゝ
やゝ思ゝゝ諸の道をゝ見ゝゝゝゝ
義のよゝあゝゝゝゝゝゝゝゝ生

死大きの工夫より外ハなきよし申すか
くてやう〳〵月とうそ稱ほとゝぎすの家
いこもすゝなくて来りよりくひよりゝ
きあに信別のゆ尊良親王と同えさ勢を
まひしハうまくをかこけ仕き後醍醐
の御門法子外祖父ハ為世の入道大納言御
女贈後三位為子そうゝ本書路とゝよりて
ようやくおくりを西勢行ひ〳〵に此道のか
まれ幼齢よりとせよかくれなく晩年まん
風格あやゝさそうをくおとせゝ

と約夕親近して此道を問そくまけ
ほとよ日ろの歌あやまり少のおくにきえ
雪のおくりとけて露そうの力量も出
きふけるゝや後ほと新葉集撰定のことを
大委附せられくまけりふゝもいく
ほとなくてまゝ毛水漂泊の身と成くその
ありしゝをにきをきまなハなれ所おとゝも
みな蒲生のこと申おくよりふゝ此道の秘
まり口授ゝも伝ゝ方をとゝあれ伝ゝ所為
をゝるれゝ伝ようゝ同をいまゝ人はかゝ

都さきけ迹とも仏のさとりをひら
くへ〜所詮あ先ちちゝ由りてより此道お
こなうといふも古来れ先達のおしへ給へるも
さて信をも篤くしてゆくゆくとゞ林
泉りのみちにまゝ因縁のうちに自然然
ふ始をり万物の性ハ不生不滅なり生滅ふ
あ川〜さ法性万理と具足せり法一性ハ天地
さきをりてあ〜ずせいとまもなくこゝろも
ゆ〜天地をとれてもまさにうるを万物の
根源なり和歌乃おとゝろまさ則是よあり

あ先ちちゝ由りてあわせいふを相の上九
とゝ仏りされと天地あひ与れ陰陽ふに
きさて日月星辰ハ天より付山川草木
ハ地より付なり日出くれば日入るあを天
地乃うちにあり中あるわさ何ぞ
その道とゝ与れを哉や吟詠して花をあ
それひ芳をかむしむハ既よおとゝたちち
それも和歌乃オ二義門なり歌の真躰
よハあ〜さ法爲〜奇をを日本の陀羅尼な
りとと古人先といふ又神明仏陀菩薩五義

これすなわちさとりの人行為の人は只深
理あるよりはすなわちあるべきなり先抑三十一字
すなわちあるべき付く堪能を不堪あるを堪
能といふは生付ふつゝかなるものとなり
さてしかるべきあるひは学問きなり
不堪といふはこゝろざしを詞をなるべ
きもあれども堪能とそのみくさのこけいこ
の功をつむことをみけ度はけふさせる秀逸さい
てこすを不堪とそしらて先をしるべ先と見るの
ばかりなきをこゝろまくゆて堪能のこゝろ

とおもふかをなるべし或は生まれつきて
既ひとはまるひとくしの其功をなすよりて
そひとりなりと書伝りとけるも此理なり
道人の中は利根の人は一向を語ず純
根乃人もこゝろざしをもて先は
の實性しりかまふあやまりそこ生付ふ
をくみにおしくやさしき人乃けいこの功と
はみるこゝろありうきき達者せいと向るり
其人古今不同
まを忘却して朝夕の風乃ふまるこ

なさましきの色よりあふつめなとうしてむ
つるのまなかあくおとにころをみてはは一大事
とあらたりかけまたる人のいふも胸中の大乾
国乃平治の成とくはくありもとせ民自然に
年にあらわるみち家時もまさに歌の席より
のうみて趣はよあむけひ治時もそれおぼし
天田にての宮しきもちのさまもひかれ
時るきさし風乃思るのとくるとの如と
あるしうかひくふしきまる風情あるし
きころ縁なるのものとさき治なり是に

付く初心乃人の心得へき肝要の條々少さ
あれきといふすへし
一 歌を詠する時ハ心をなやますくまやと
いふそうまきの質をすりまさ理なりけれのとより
八方の物よりうつりそれをみて人の私にする
ところなうすされといひみて三代集の
うまハたくありてり私なくうらきくにおとなり
まさそれをしのし三百篇の詩乃性情を吟
詠してそくするほかうおとしそれよりは
よ歌道におとろへて中古以来の事ハおくるも

ひいまこそ三代集の中にも
後拾遺の序をいうにはさ記おとめま
きりてきこめるなりゝ載集のさきはらふ後拾
卿基俊後頼なとゝ代遠中無せりいとんや
西行上人後鳥羽卿定家卿なとゝ和歌の大聖人
ありおれてよるとく新古今の一集文質全備
て今古のひとゝきあるをもみるに淳
古の風一変するにはいたれとも其中と美
く先にしきをもとゝ以しさはるむ
くしの人のロまの孫ありしあ先序のみ

ちふくゝ相續せんおれてはるて拾
そそよく絶妙のゝ所ゝと楽しなを不絶妙
といゝてゝて人間ゝ日月をとゝるれ世
た人のいひゝさあとゝ妙者イなり但先つし
きゝゝるとよんあくゝそりやもれり玉拾
のおすひをるすかすおれこゝるゝゝり取
仕て一重の上ゝゝゝゝを楽しいさす色し
古人の云ゝ後のうゝゝゝゝゝを撰ゝと
いゝ所ゝゝゝゝゝ案しゝてゝを世
のうゝをとみくゝそハそゝさりのうゝ

も重くあのうく教てう五十二位をへくの母
ゐうおいやしまさうそにちうとおとてうる
そいうの人てて弁説そくみう容儀よく
文章伎藝ませにすくれたりとも仏ふるも
のハ身ととて世を治うそちうちとし
文章伎藝ホハ奇のおとうのおとう
一
詞とえうくへきます
詞ハ歌の文なりかきうなると後撰拾遺より
金葉詞花のうち用ひまくハ奇をもむしり
ちうをおとうといとも悪とえうあと

なきうとうとて歌のもくいやきに似さ
ま君来合躰時節到来をゆるとうあ
新古今の一集仏乃泉みおとあきをの
まこのうとも詞の花まりひそくみて人代先
とれうし人乃身をとうとうとう光く錦繡
を織ふうし金石と合奏をうう似ちうの
うう又あまりにやさしく花詞をなう質を
かとうとうりとうて極上の達者ともうか
をうしなうとうとして志をおとうとすれ
いみうけまさきくの歌人ハ其身

をうへのまつりのえのまをあらそひまう弾てく
さのいけをのかやうをまはせるよ奇まい
なる意うあるすいうくう天地とうこうし
鬼外をやくくくきやされむくまひ山ふ
をもくしてのおとをもくるあり文質彬彬と
て君子なりと孔子もとれられり奇に藻
かりてよみいてもとうれよくまろを思ふく
おくにうれをもひ十分よきおと
をこそふるをやすくそのまますてうちをく
ふくもとう角をなのふこしとそ城をふるまる

をうへのまつりのえのまをあらそひ上下おろをあをを
八同仏りてをやさきさきおそにしうへ
てきくよく打ろくく吟詠すふ打ふを
ゆく感情をあらやうにうなもを古人
のおくものうへまおを思ふへといふを
思ふりまくあれうしこを思ふりそよ
きかくまくうちをくるれ貫之八奇
一首と共ひるりにみかけりといひた
をへ多くたちあおとをふとよくえくひ
けるまうあるをめ所詮詞とすくを

く儲ぬまでなくなるもの
ゆゑなれとそれゆゑせりす
れまりなれおとゝ系と三代集とおつゝもと
四り出とも世のすゑとりちゝふきゝひて
歌乃ゝを抜くちりめさいひゝふさか
末かゝりそゝゆゝうくとちゝ出おとゝ系ふにて
ゆゝとは乃集のおとゝ系詠をゝきこと是
論あゝすゝす根又古今後撰のおとゝ系
も同あいきおとゝ系うゝをゝく不可詠又
ゝゝをおとゝ系のゝうゝゝゝけあと三代集

たゝ詞をゝゝとして其詞よみゝ出ゝと決ゝ
きゝまりみゝてゝりちゝを入てゝゝりをゝ
みゝさゝゝとゝゝの出ハゝゝ古きこと系ふとゝ
又ゝ出ゝちゝゝゝ又ゝ高名ゝ此を古詞
とゝりてゝりゝ風情とゝあゝゝ決ゝ決ゝ
乃ゝゝゝきゝゝ近来連歌の詞を寄にゝし
てゝゝゝりあゝ是寄の浅近ゝゝる基也
昔の連歌ハゝゝゝゝゝゝに寄ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おなじきものなれども
とはるかやうなれば上下の句を歌ふ
しそうもくかつし今やうの連歌
を歌ふまねをもくに文は六義のもくに
叶へくす歌の詞を歌にしみ連歌の詞
と連歌はせもくに歌はせも達せぬ人と云ふ
まや連歌又古来の一道なり是とは
にはのくす

一本歌取様くます

古に出たるかくの中古今集のまねり古今

集の歌に万葉集の歌と同様なる歌あ
れば本歌の分まくハなり只万葉のおもく
きとやもくに歌はるまくかは所もなくさはるまくの歌
はるはまくかはくまくはるなり此法詩部もまた
とひくまくはるなり
黄山谷の点南の十絶句白樂天の詩と取て
或三字或二字敷演二字なる歌を作り長し山谷を前哲に
て樂天を比喩なり
と云ふの今の世まで本歌取と云ふ
是也

喩き三百篇の詩ハそゝ性情を吟詠と
おもうけるものゝよるかりしを
李杜韓柳の詩ゝ詩書百家の
詞さゝの曹幼劉陶謝の詩ゝをとり
てさゝをそゝみまう音ゝ今の
哥の本歌取ゝ可叶季の哥を
き意雑にとりは恋雑とゝ季にとゝを
加へゝておとゝ哥をとりてゝをと
あゝしくゝたゝ人ゝをとり歌
とりちゝ人ゝを歌

いふせしおの求あまのほゝきす
まゝとゝ打ゝてしゝさめの
花の限ゝをけふ方ゝ
おゝもいまゝ月すゝのまゝやま
山ゝをひゝを季にゝそゝ例ゝを
恨の哥ゝ端にやゝれり又同季景物ゝれ
ゝゝ山ゝをにあゝしくゝゝりぬれゝなゝる
きゝり
おほゝゝ橘のゝはひにかをみつ
くゝりもゝそゝ恋の東の月

おもしろきものなれば月にまた
わかれをしまんとせ
しかあれハ其季をすぎて殊幽侍ふ
さしてろや紛れの風あるべ
月をまちしくらしかねてひ先
わすれたんまけるのいとあはれに
いとゝの心のうゝ称したあはれ風
是又大意なり例也
又本歌の詞のとき所とゝ人をいハ風骨あ
まそ世のうゝ所賛称するべたあ

ものはよきまり
きものの流れなくてあるべし月ハおの
心はゝゝおもしろ紛れなるに
おりあはもうきれそへけよの中の
人のうゝまれそ先の神
此をゝひあるゝあるべきを今本歌取さ
れかはりあるべき歌勝れもゝ歌ゝ
といさせ歌ハをして志べしゝ本意と
はまをきて新作といふ人を心きゝ
歌人昔の奇とゝあてゝひたゝうあれも

をめつらしきよき句にかなれども由なきは性
情と吟詠せめよりて打もう音僕り姿
妙なることれ古くしるもまた此時こそ
歌取やうハ粗伝はれり

一

當座の歌よむ時可心得事
題と出首にくも十首ともとりそろんに時
ハまつ其題を一くにみさだめて此題をハ
かくよむへし題ハ此物とめて後
へしとよきを強よ伝あてうひとりの聊業
しうへて後取分秀逸のおもむきハ題

を分よりて結構案すべし若あまさあるに時
くくくくに結句とよはんとくくくくくに一
度の歌皆書そろへそんとき我題ろよ
まめ句をてそんとき由ちにせ先よりわれて
ハいとくしまひしておくへくすむるの
洲花の河會ハ三首ともに歌とあくすす
強ま上位乃人ハ歌よ大ますせるるかまみ題と
て次乃人ハ歌とのきそこちさこそ故
人ハひるうう結して一度の句皆案ん
ま一方讀おくらんより八五七五の和唇なり也清浦

朋輩の諸人の言葉をうけてきく一月讀とれたら
けるまいく世ふるまの水のみるみとこうさ
とよみくくうとうとくかまにけるも中く殊勝
御しうさせるすもおかめよ一座とをさんとと
八未練の至極なるれし

一 重日お影の時可異事

当座出影乃時八餘念よわるに先を楽す
おまよりて中くよるしかまもおまも兼日
乃はく余日あるをそのうて何ときてもお
さ公遣就はしてうち色やるふをのるしる

連歌君長よ仕雅去東家よ対面しあとと
ふかるよ幼日近座てたりて於ろき寧
おまよりてそく当座をいくはるちめ
なくまさをとりさ法るる奇といさす時よ
他人八月意物くして案一重をるはふ
おしけるる奇よみて人やられりたるあ
道も物うく迎屋のかあくる也只影取をさん
たるめ当座のるひををてよくあんしさ
きはうう他不虞にあるじめとと表状はとるも
此理如て抑此当座重日の表を雅も公格べき

おとろへおとしくをとし発すへきりあ
めりやさりろろくをかきすとすれ
ともやすきまりあやまりをもろり疾
疾に不死して相摩に死をはをとへ為
をくあり昔五代の時馮唐といふ人君の使
り寄に逆けるり大剣ハ小剣ハ刑ちと玄峻
難をとをろとて八馬りをゆうせすこの
をみとよく取をく治ふまゆへなく過をる
う寄の邪りり成都といふ八平化して仏安
くをりひてをりをく落馬し寄り三十二字

けをくはをやをきおとをみを人思りを意
に八一大まりを行ゆりりよりをく餘りお
とあをきおをををへりをくあり
一初学の人古歌乃弾りをきて意清分
へきこと初心まんはをく行をしてを上手
の其道とををく自由自在りおと業に
あをきを弾とも其をと唐にをもせて
弾りをりかをくよりを弾りうやは
くをりるをあおをりをを案して達
者とひをりかりまををを見才一のひ

うまのあしうそのあるもののみなを決定
にはうまくもりうそよりはかりあるも
やうにさとうそうしく山一筋月あるく
大屋うらかにはよみそゆけそやう月を
うさはくあるれらめれく自然りむし
の人にそうちるひまさ山ゆく敷なう
敵もをのけくおれ来たり初瓜の時まれ
りうきうそよまんとうるむとそう人
と昔唐國の中に宋と云國りとうる
新田史るそ文れ日乃田乃苗のみし

きさと紙るけきくほねを打て一こに成
きあけくとく長ちきむとして苗の形
れをちくさうしく仏理諸道り
るうそでれ伊大宮れ内府妙音院倉道
相國りひとをるひとにある時相國
禅門志然されけるを御分のひと日来ち
わらくゆゆハいるやうにそいこするよかさ
ハまけれと内府答て云別しそうまゆ
すそそ御ひとのあまるよ殊勝ハれ
れかとにけうそうにうくりゆん

とをりなみ仰くと申されし故ちりかま
(て)仰のまゝ孫十人がもとに出されをる
も此道理なり常に申してまる宮き
神のうせ

ちらくちるものとは思はさりしてて
うつしたちまちれぬ雪うゝ降りは
り雖心やてやくしとおもふみを
をれちりるをや人やまいりん
おゝくちるを花さきうむる心失のを
いくとしてのうにまわり本

あるをはまき梅のちるを色なをし
さあ月のおきのみうて
はるくしひとまあふも失あるまき弁て
伝初をくしくて一柳あるなり其歌り
於て八秀逸なれと後生秀歌のわろ
おくきりあるす後学ま孫ひろことなる
へきこりまきまるひてわろかるき弁
去の歌まに亨のうきこと云て
み孫りわろおくきをのる
秋と云に長れと後月春を

さもあやしくおくにうけたるもの
ものおもふそなれる露やハ神よをく
ちるめそなう那 梅まいゆふれ
なくしこ心しこ海ちのあさ那りく
きれふハうをれよをのをちと
うをの約雲うのこのこるすなの
ちうを海きのかけるまいやま
よれをかるれもせの草かけるひて
すしくをるゆをちまいろう
ちるハ上をの風骨とをて幽意微詞れ

もちろしやいへをしも中くおとをかし恋
の人町田弟をれるろくれるひてまれひ
よまは那路り落へきまま建宝ちり千
歳乃しさけをしい道を数得を田人舟
人ゝ中小一人れ未おとはるはをのけるよ
みもやせんすん先年老拙ハ育をて
信州中書王ゝ奉ゝ合琵琶をし時れ
の歌ゝよふへきを人をもきふにとまを
は地をあひををもひくいとをふをを南に
かきを人作しふ山蓮生れをひちけると

り感するこころの我二百首のうたを
よみて人のうたをきけるひて玉津嶋
の寄合と名付しゆゑの風情有
いまゝ人まねせしもあらしとて其所
秋を始めかの所ひー
おれもとゝれんすハすきふる
すゑゝの風の煙のくけしき
此一首古人もなしほにて新葉
集より入り是又まねびてきさきのうち
おのゝくひ古来れ侯けまゝ心肝よそ

みやこのうちゝくゝ色どりくなり所詮心質
おとなかやうにはよまんとて歌を詠
くゝ出てゝくゝもはりたるよみをつくるもの
を高上除奥なれとうきてにおとるゆ
えて物なるもおとるよゆきうんと見ぬ
へき寄の歌

月にさむく煙のちよ風あくなよ
ありのみ人のゆ歌よ入てけ
はのくにのなにの春ハゆ歌なれや
ゆかれ系り風やさはちり

あらそひそのそのまことにかるまし
ともよふこゑのすこしにぬれ
又やんかるけくみのにしくるまり
花のゆきちるまりあけぼの
面はくるくる花をら花は風すきて
心ほくるくきをもになくいの
かくるきす一こゑきてうさをの
もつるの末もこと今をくいの
ふれるハ歌の面るこゑのすてすきるる
やうりみえくあるりに涼けもし

さ物ゑの人ハ行ふ屋ーさのなるくれはるけ
にてハよ見ゆせくこき遊去高砂の吉神
をそをつう知音ーあるすたいりのかる
ーは関うこなるの時ハ近代為世入道大
納言詠なり幽情古人より及て人を感す
れ高風をにあて見をくそうるりこ
ようそうやうよよはんとをはまこうさ換を
ゑまちきの一例ほとそなるとたて
ありの平懐奇ーりをりあし心はるくへ

きたり心前の六ケ條之義よりへて色
をいさせりされハそ世間の初心乃そあ
にたゝ先をとゝるれも法義よ及とす其上
此道の秘すなといやす別にあらすす
只我心よりいてゝ心とゝるまなれ夫
を趣向たるも仏得をゝも肝要ハそ
教寄れ仏さ一ゝ京極入道中納言心
来ゝ寺尤の一門此道の宗匠なり彼部
ゝ達者と教寄ゝをゝるゝ部ゝ達
者より八教寄れ人と執すゝ故大
ハかゝり行ひゝゝり彼大者ハ為世入道大納
言時生の時為友卿定為ゝ下ゝ一
門の人ゝ他家ゝ小倉公雄入道宋祐言
ホ会合して定家卿遺法京極家ゝて
毎月乃寄れ談義ゝて不闕ゝ
ゝ時不縁ゝゝて其一ゝのゝみて幼年よ
ゝ身とうそせゝしそれとゝもたゝ教
寄の人を一書仁尝飯ゝゝとそかゝう
をゝまひゝ也ゝのいそれあゝませ
秋道仁ゝゝ古ゝ口伝ゝとハ古ゝ一

もとより人のをしへなり不審なきなり
まづまづすこしもわかるべきようにみいさ
す歌六義よりかるべして人倫とやまとは異
邦とをんなじむきなれども此道の詮要なれ共
おもきはめてなほ未だ堪の為にまさい
くたくるべきおとなしき道をはそれ依学ぶ
て其餘の和漢乃至歌をこういうなかと
壮年乃ちろはむしひしらもそれ打乱中は
年とをくりてたるべきまも伯ますは
てはたちとせたちはは心材は流落して何ま

も隅生のおとくなりにそれ行ふ人を道ひくか
ものも伯へまは此像に只一時の用語にやは
を後日の癖にて備へ大概たるしてあ
ふへきよりまたひくの意情はれはまま
よりてたくかりたるべ筆を深るものもさて
も顕昭は橋ら仮斎は今のせまはなれもの
とうう多年仏教伯に其あら未学は一
童子雲霞線のおとはいくまつりてなを祖
風を忘れはは道はよ仏さあるよりかり伯
しうあるうあもはまひ行れ他見は禁

制ちゝ人一目又世てきの侍ハすみやう
に西丁童子にさけ〳〵ゝ後まて殘
里わ〳〵まゝんまゝハ一ふた位より玉ゆ〳〵由
乃ゆ和も恐あり又ハ當時のあさ之ち義
のそ〳〵ゝもゝ世れかゝ〳〵後世の揚子雲ハ
うゝそゝ所よあゝさけもゝれるゝし

右此一卷者南禅寺禅栖院耕雲
魏公上人所述而和評之道深切
著明者也寂可秘之

文安五戊辰暦小春既望日誌之

於南朝補任也
○権大納言右大将藤原長親卿　法名明魏　又号耕雲
新後拾遺　新続古今両集共ニ明魏法師ト入　撰摘題和哥集
尹大納言師賢卿孫権中納言家賢卿息
○新葉和歌集　弘和元年十二月三日奏覧　新葉ニハ右近
大将長親ト有
中務卿　兵仗
○尊良親王　信州中書王ト申　配於土佐国其後越前国於金崎城自害　後醍醐天皇皇子御母贈従三位為子入道大納言為世女

桂川抄

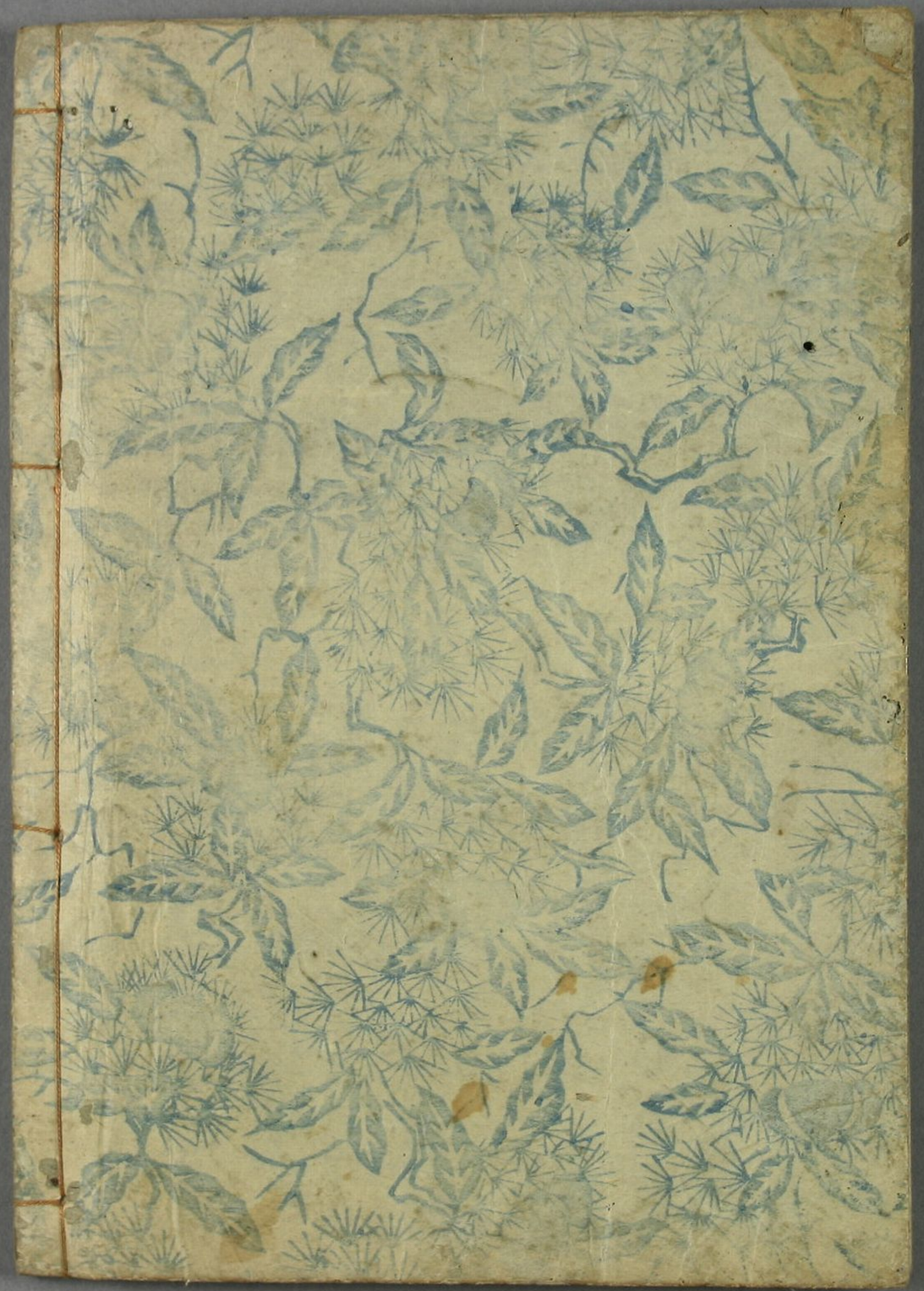
三日月　夕月夜　上弦月　望月
不知夜月　立待月　居待月　臥待月
廿日月　下弦月　有明月
三月ニ三ツ月ヲ夕保ヒウリ出ル物ヲ金波
ヲ作
夕月夜　月ノハツカ月ヲ夕月
夜ヲ　月ノ出ル比ヲ夕月
夜ヲ　源氏物語ニ月ノ大小
ニヨリテ一日二日ノ夕ニモ出ル有リ夕月夜
作ル十日ヨリ月ノ出ル比ヲ宵ノ出ル月ト

月ぜ夕月ぜとなりて
上弦月八七日八日九日は西三夜のうち月ぶち
て事月ぶてをしむまにて
望月を十五日といふ
五日にてはみちて月の事を俗に望に候
あり事暦をの部後よさてある事作を
不知ぶてを十六日ぶてをいざよひ月ぶてをこよひ
たちまち月ぜも十作りんつまとをうち四つ時て
十六日のことをいさよひと申いをるあれまたを
やたちまち月ぜもいさよひとやいるり

立待月十七日ぶてをあれも望ぶまりて一夜よ
りたちまちぬまたく作をさなり
居待月十八日ぶていまだ細く居おまい
臥待月十九日ぶてをなりてい源氏物語よ
女楽試の日を宵月夜日はりの事と事作を臥
待月ぶてをつのぜを出ぶるんをとなりとい海
松高出月作の事をとなり臥待月ぶてを
作をを十九日ぶ夜のうちくれ方ぶ臥待ぶてを
たしいめや豊武記第十ぶ
を作

廿日月とつゝ鄙ことゝ五畳御永徳の比乃妻ふ
おそくまきと廿日の月出ぬまちを
なげくもひ乃つゝ百ゝく出ぬうさ
を代乃袖を濡こゝ可見ひ事を例おもくい
八重清秋の夜待ちて月とあそちてこゝも濡
月ふもうこ廿日乃月ものもうこんもろ事不
寄なくいるとゝを月乃百そたゝふ顕よあ
次第十九夜月ふあくゝ夜ふてくい出る月是又
世俗俗名
下弦月　廿五日こゝ月ふみこゝ月の事

にくくいゝ弓張月とい鄙よハ上弦ゝ月ゝ言へ
ゝ也
ゝ乃月を曉ゝけゝくゝ出ぬ来乃月ゝ作
又廿日ゝうゝ乃月ゝ殘月ふゝ也ひてゝ
有明とゝ言へゝ先賢ゝ傳ゝ也

此小冊依室町殿御所令行進作也
詣吾菩薩戒尼鏡秀と書之

文安五年 七月日　　和歌舊老法印玄翁